

### 平将門と神田明神と唱門師

丸山, 忠綱 / Maruyama, Tadatsuna

---

(出版者 / Publisher)

法政大学史学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学史学会々報 / 法政大学史学会々報

(巻 / Volume)

5

(開始ページ / Start Page)

11

(終了ページ / End Page)

14

(発行年 / Year)

1953-03

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00010442>

## 平將門と神田明神と唱門師

## 丸 山 忠 綱

最近平將門が古代的王朝政權に対して叛乱を起したその叛逆的精神はシヨウモン(將門)塚をつくつて將門を祀つた地方人のなかにも長く記憶されたと石母田正氏が唱えられるや(古代末期の政治形)、この考は中央公論の共同研究「偽らぬ日本史」の中にも採り容れられ更に敷衍され、神田明神のような江戸の真ん中にある代表的な神社の祭神の一が平將門であるのは一般民衆の支配者に対する反感の故に、叛逆者たる彼が人気者として、祀られるに至つたものであるとされている。果してそうであろうか。

シヨウモン塚は全国各地に見られ、將軍塚とも言われていると言うが、將軍塚と言う場合は勝軍塚なども書き坂上田村麻呂を祀つたとされることが多いし、(開田耕筆)シヨウモン塚と言う時も例えば、「新篤武蔵風土記稿」一八二などには、入間郡新田村に証文塚として各々高さ六尺ばかりの塚が三つあるがそれは往昔村境の証に築いたものであるとしている如く必ずしも將門塚と考えられていた訳でもなさそうである。

神田明神はオオナムチノミコトを祀るとも(「江戸神社略記」)「望海毎  
 其他」或は平將門を祀るとも(「前太平記」)「神社考」あるいは二  
 其他」(「江戸名所記」)その他

座合祀であるとも(「江戸惣鹿子」)「東都紀行」、あるいは安房の洲崎明神を勧請したものであるとも(「白石手」)、あるいは嘉元年間(一三〇三—一三〇六、又延文年間じしゅう)時宗の他阿(真教)が諸國遊説の砌、武蔵国柴崎村で柴崎道場日輪寺を開いたが、ここにはもと天合宗の了圓の開基の旧刹あり、境内に祀つてあつた將門の靈が祟りをなすのでこれをいわい鎮めて寺を時宗にあらためたのであるとも(「戸惣鹿子」)「江」説明され、衆説紛々として決するところがない。要するに神田明神に関する草創説、勧請説何れも江戸時代に入つてからの記録、書冊に見えているものであつて、全幅的な信頼はおき難いと言わなければならぬ。

更に山崎闇齋の説によれば本社の祭神はササノオノミコトであるとも言ふ(「江戸神社略記」)「江」。これら諸説の中で安房の洲崎明神を勧請したものであると「永享記」によつて唱えた新井白石の説は解釈しにくい、それ以外の説の中に探るべきものがあるように思われる。先ず、ササノオノミコトにしてもオオナムチノミコトにしても何れも出雲系の神であり、就中後者は大黒様と

して、惠比須様と並んで民間殊に中世、近世の遊芸の徒、賤民などの間に篤い信仰をもつていたことを忘れてはなるまい。次に時宗であるが、これは一遍のひらいたところで、彼は全国を遊説して民衆ことに下層民賤民の間に信仰をひろめ、遊行上人と称せられたのである。他阿はその二世に当る。又、神田明神はもと、現今の神田橋の内側土井大炊頭利勝の邸宅敷地の辺りにあつたのであるが、この場所が曲輪の中に入り、江城守護の大名屋敷をこの辺りにあつめるようになってから、一旦駿河台に移され、更に元和二年（一六六）家康の歿すると前後して現今の地に移されたものである（神田神）。「落穂集」は神田明神は家康が入部した頃（社書上）（天正十八年（一五九〇））城内にあつたとの説を否定し、明神は城の近くの大木の茂る中に鎮座し、毎年九月祭礼の節は木立の中に幟を立てながら、近在町方より栗柿をはじめ色々の売買物を持出し、人出多かつたと当時の情景を彷彿させるような記述をしている。

以上のことをあたまにおいて次に室町時代の記録に多く見出され、江戸時代においてもなお所見の少くない賤民の一種「ショウモン（シ）」のことを考えてみよう。ショウモン（シ）は聖門（師）、証文（士）、声聞（身）、正文、唱聞、唱文（師）など雑多な書き方があるが唱門（師）又は声聞（師）と書くのが普通である。これについては古く柳田国男氏（「唱門師の話」）、喜田貞吉博士（「声聞師考」民）などの優れた研究がある。ショウモンシは「言（族と歴史三ノ六）」などの優れた研究がある。ショウモンシは「言（継卿記）」には声聞師の字を以て屢々現れて来るが、正月十八日の三毬打の時には禁裏に参上して之を囀す例であつた（永祿十二、一、十九）と

か、病人のあつた場合に依頼をうけ算をおいて祈禱をした（永祿八）

六、二十、天正）とか、冬季籠の塗替の節に来て地祭をした（文天四、九、二十八）とか見え、彼等の社会的地位が低く往々声聞師いじめがあつたことも見える（天文十七、一、十八）。京都では上の御霊の鳥居の脇に唱門師村と言つて一廓があり、「応仁広記」にはここで東西両軍の戦鬪が行われたことを記しており、「山城名勝志」（宝永二）にはこの頃もここには唱門師が多く居住していたことが見える。「閑田耕筆」には「一種の巫祝、祓、祈禱、方角占卜のことなどを業とせるもの、土御門家支配と標を出せるが洛外に見ゆるを、京師にては名目をうしなへり、近江にては是をいよもじといふ」とあり、「近江輿地志略」には大津市中にこの部落があつて、新町、神子町などとも呼んだ。夫は唱門師で妻は粹巫を業とした。一般人は被等との通婚を忌んだ、と見えてゐる。「年中行事大成」には祇園の犬神人も又唱門師と一つものであるとの説が見える。

大体足利時代の唱門師は下級の陰陽師で、祈禱もすれば初春の祝言も唱え、算置きと歌舞遊芸とを兼ね、御霊会の風俗踊にも加わる（「山城名勝志」所）など、傀儡師、算所大夫、田楽法師、鉢叩、鉦打などと似通ひ、広い意味ではその一類であると言つてよからう。初春の祝言を述べるところは正に近世の天和、三河などの万歳に等しい。今日でも越前万歳は自らショウモンシと称している（今立）。又、喜田博士はこれらの唱門師は右の如き性格のものであることは確かであるが、源流を尋ねれば中世における卑しい俗法師、破戒僧の「声聞」が本義であつて、彼等の生計の多くは寺院に所属し、寺院境内の掃除を掌り、傍ら警固の任や雑務に当

り、次第に内職として雑多な職業に従事するに至り、近世以降においてはその本義がうすれるとともに、内職の方が表看板となつた遊芸民が多く別の名称で呼ばれるようになったとされた(前掲論女)。要するにシヨウモンジは本来俗法師であり、同時に寺院神社に關係し、その他の遊芸にも関わる漠然たる賤民の一種あるいは一種の賤民の汎称であると言ふべきである。

そうして今一度、「改撰江戸志」の次の記事を見よう。

日輪寺其阿云、此社は元日輪寺の預りなりしをいつの頃にや、今の神主柴崎豊後守一人に領せられしとぞ。

事跡合考云、元來神田明神は日輪寺の持分なりし。社と寺と引分れし時、日輪寺に居たる軽き男を尨人住僧より申し渡し、其方社に付居て掃除なとももいたし候へとて、かの社に付置候所、朝日のかかやく如く、日本国より人民御城下に集り候ゆへおひたたく社繁栄し、終にかの男神主となる。今の柴崎氏はなり。当世神主三代宮内少輔か親までは、六月かの社中に鎮座の牛頭天王祭礼の催として、神田郷中まはりし時、猿田彦の仮面をみつから携へ、幣を持って子供にはやさせ、赤き紙の小符に牛頭天王と印したるをまきあたへしとなり。この土地いまも猶其古風城下に有。云々。

これを見ると日輪寺に居た軽き男が社について掃除などせよと言われたとか、古くは自ら猿田彦の仮面をかぶつて廻つたと言ふが如きは正にシヨウモンジの姿をしのばせるではないか。しかも明神祠が遊行上人二世他阿が諸国遊説の砌再興したものとされることは益々シヨウモンジとの關係を思わせる。「望海每談」に遺憾千万にも古來社人持の社であつたのを遊行寺持とされたの

でそのため元且には踊り念仏がある。社人不快なれどやむをえぬと見えているのは却つてその裏を示しているように思われる。江戸時代になつて徳川氏の崇敬をかちえた所以は恐らく三河万歳が徳川氏の故地との特別な關係を言いたつてその鼻祖をえたところに基づくのではあるまいか。万歳とシヨウモンジとが同類であることを考えるとこのことはさ迄不審ではあるまい。

そこで甚だ大胆な臆説であるが、神田明神はもとシヨウモンジの祀つていたオオナムチノミコト(又はササノオノミコト)であつたのであろう。それが江戸時代に入る頃においては總括的名称としてのシヨウモンジの名が忘れられるようになり、各個別の職業名に分化して行つたことや、その分化した職業の一二たる沙弥・鉦打類(地方凡取扱方の事)などからおして、一面世間がシウモン(唱門)の神を將門の神と考へるようになったこともあろうし、又一面その風潮に乗じ柴崎氏などの方から將門に附会し自家の素姓を隠蔽せんとした点もあつたのではなからうかと推察する。そうでなくては嚴重な身分制をしき、封建体制を維持せんとしていた幕府がこの崇敬にむしる力を入れ、一般民衆の祭礼として迎へられると言ふのは少々可笑しいではないか。

しからば地方におけるシヨウモン塚は如何なるものかと言ふとこれも極めて無理なく解釈することが出来る。「社会事彙」所引の「滑稽雑談」には唱門師とシユクとは同じであると思へてゐるし「閑田耕筆」には「此もの等(シヨウモン)」近江又撰津にも古塚あるあたりに住居せるがあれば、守烟何戸と式にみゆる其子孫にやと或人はいへり。」と言つてゐる。シヨウモンが即ちシユク(風、

宿)であることほほ明かであり、シユクは本居内達の「賤者考」以来、古の守戸(守畑)の末であろうことは先ず定説となつてゐる。従つてそれが古塚のほとりに住んでゐることが多いのは古い風習を残したものだと言われる。こう見て来ると各地にあるシヨウモン塚も唱門塚であつて将門塚でないことは疑を容れぬ。前述のシヨウモン塚が証文塚と考えられた例は却つてシヨウモン(唱門)の意味が不明になつて来たことを示し、その傾向が将門塚とて平将門に附会するに至る可能性が多かつたことを裏から示しているとも言えよう。

かくてシヨウモン塚即ち将門塚であつて、一般民衆が将門を王朝政権に対する叛逆児として崇敬した結果生じたものであると見るのは無理であるとしなければなるまい。

唯、一般人から賤視された唱門師たちが、それを将門に附会し自らの身分を韜晦しながら、支配階級に対するひそやかなしかも根強い叛逆精神を持統するよすが、としたと言ふようなことがなか

つたとは勿論断言出来ない。

ここで、叛逆心を持出さなくても崇りに対する反応とか悲劇的末路に対する同情などと言ふ観点から将門崇拜も解釈出来ると思ふのであるが、これは自ら別問題となるのでここでは触れない。又時宗のことについてもつと深く問題とすべきことが多々あるであろうがそこ迄は及びきれぬので不満であるがこのままでおく。

以上神田明神が平将門を祀つたとする説も江戸時代になつてからか、それを去る速くない頃に漸次醸成せられて来たものであらうし、神田明神そのものも、その前に古祠があつたかなかつたかは別として、その祀られるに至つたのは伝えの如く南北朝を出ないものであり、それは初め唱門師たちの神であつたらうと言ふことを明かにするとともに、直に民衆の支配階級に対する叛逆精神に結びつけることの無理な所以を論じたつもりである。